

あした 明日の希望

悲しみよありがとう 高江常男物語



たび重なる事故で右目と両腕を失いつつも、事業を立ち上げ、多くの障がい者に仕事と希望を与えた男の感動の実話

日 時 平成25年10月27日(日) 午後1時30分

会 場 士別市民文化センター 大ホール

入 場 料 500円(チケット販売)

チケットは士別市社会福祉協議会で取扱いしております

主 催 士別市共同募金委員会

共 催 士別市・士別市社会福祉協議会・士別市ボランティアセン

ター

製作総指揮監督 : 山田 火砂子

声の出演 : 水木 一郎・平 淑恵・星奈 優里・磯村 みどり

他

ナレーション : 市原 悦子

文部科学省選定

社団法人 日本PTA全国協議会 推薦

製 作 現代ぷろだくしょん

問合わせ 士別市共同募金委員会事務局(小笠原・吉倉)

士別市東5条3丁目 士別市社会福祉協議会内



… 物語 …

強靱な意志と不屈の精神で「社会福祉法人 北海道光生舎」を創った故高江常男氏の、身体障がい者福祉への使命感と生きる希望を描いた、実話に基づいたドラマです。障がい者の理想郷を作るために、すべてをかけて壮絶な人生に挑んだ、一人の重度障がい者の感動の物語です。

北海道芦別の炭坑住宅に生まれた高江常男は、10歳の頃に右目に竹とんぼを刺して片目は義眼となった。そして、昭和19年の17歳のとき、電気事故のため両手を失った。中標津付近に空港の建設をするための電気工事の仕事に従事し、高い鉄塔に登り電線を張るという工事をしていた。その時に、本来であれば流れていないはずの電線に3000ボルトの電流が流れており、それを両手で掴んだ瞬間、本人は意識がない状態となる。通常であれば3000ボルトの電流に感電した段階で即死であろうが、運よく一命は取り留めたものの、両腕を切断することになった。

両手が無くなった常男は、詩や小説を書いて生きていくことを考え、口にペンをくわえて字を書く練習を始めた。本人は尋常小学校しか出ていないため、百科事典などの本で勉強して、何とか作家として生きていこうと考えた。医者や占い師からこんな大病をした者はせいぜい生きても10年だと言われたので、睡眠時間を削り、眠くなると足に針を刺したり、冷水に顔をつけたりして1日4時間という睡眠時間で、口で字を書く練習をし、本を読み、詩を書いた。

当時は炭坑が全盛の頃で、地元の赤平で炭坑の仲間と共に詩集などを出していた。たまたま、その中に地方紙の新聞の編集長がいて、新聞記者として職を得ることができた。障がいにより仕事ができなかった者が仕事を得る喜びと、人として仕事をすることの重要さを味わった瞬間であった。

全盛だった炭坑もエネルギー革命で徐々に斜陽化していた時代でもあり、町には、炭鉱事故で怪我をした障がい者がたくさんいた。彼らに何とか就職を斡旋しようと思うが、どこも雇ってくれる所はなかった。

「両手のない自分が仕事を見つけてようやく飯が食えるようになった。今度はこの障がい者の人たちの仕事を見つけないなら自分たちで仕事をやるしかない」と、創業を決意する。

クリーニングの仕事を選んだ理由は、1つに、家族経営のクリーニング屋が多かったため、機械化によって大量生産すれば、障がい者でも一般の人に負けない生産性を上げることができると考えたためである。2つ目は、クリーニングはたくさんの行程に分けられるので、片手のない人は片手のいない仕事、足の悪い人はそれにあつた仕事というように、作業の細分化ができると考えた。最後に、当時は高度経済成長時代だったので、これから日本人は豊かになり、必ずたくさんの服を着るであろう。将来的にクリーニングの仕事は絶対伸びると考えたのである。

北海道光生舎は、今では600人もの人たちが働く大きな工場となり、北海道で1、2位を争う規模の会社に成長している。

(2007年7月27日、脳梗塞により逝去される)